

## 精神発達遅滞幼児の治療教育の研究

### I 過程としての時間

—— 盲幼児の遊びは始めるまで ——

研究第8部 津 守 真

#### 1. はじめに

子どもが自分の遊びを見出すまでには、ある経過を必要とすることは、これまでの私の研究において、すでに指摘したところである（注1）。模索の時間を経た後に子どもが自分からはじめた遊びは、時が熟する前に、外からしむけられた遊びとは、質的に異なる。前者においては、子ども自身に感じるものがある（注2）、そこから意志が生れ、動きとなる。そして、一度び動きはじめた活動には、その中に、次の活動を生む契機がある。後者においては、子どもが感じるより先に、ある活動を課せられて——すなわち、過程としての時間は、それとは異質な外的時間により断ち切られて、それまでつづいてきた活動とは別個の活動が課せられて——その活動は終結する。そこには、意志のはたらく場はないと考えられる。このような過程と意志との関連は、一般に、幼児の遊びにみられることであるが、知恵おくれの幼児の遊びに関しても同様である。

たまたま、週に1日、私が担当することになった、知恵おくれの盲幼児Sとのかなり長期間にわたる接触において、毎回の保育の中で当面せざるを得なかったことはこの過程としての時間であった。

この過程は、かなり長時間にわたる時間経過の中で起ることがらであり、（家庭指導グループの場合には、午前10時から、午後1時半までが保育時間である）また、結果として、大きな時間単位の中で見るときに明らかになってくることであるので、短時間の断片的な資料にはあらわれにくいことがらである。また、これは、子ども自身の内的過程にふれることであるので、子どもと、ある時間、生活を共にする保育者となるときに、子どもの動きの微妙な変化をとらえやすくなる。たとえば、子どもが決然と立ち上って、おとなからはなれて歩きはじめる場面で、立ち上って歩く行動はいくつも観察されるが

「決然と」「おとなからはなれて」歩きはじめるのは、ある特定の瞬間に、保育者によってとらえられるべきことである。

ここでの事例資料は、保育者として子どもにふれた体験を、保育終了後に記録したものである。昭和46年10月より、昭和49年3月まで、約2年半にわたる、盲児Sが3歳から6歳に至る期間であり、ここに示すものは、その前半の約半年分に該当する。

ここで、Sの入っている集団は、知恵おくれの幼児、約8人の集団であり、数人のおとなの保育者が参加している。私は、その中の1人であり、この記録の当時は、Sの担当者としての役割をもっていた。ただし、他の子どもも周囲にいたので、他の子どもが近寄ってくれば、その子どもたちの相手となる。Sの担当者としての立場は、この後、次第に薄れてゆくが、ここに示す記録の当時は、1日中、Sと共に過すことが多かった。

#### 注1

津守 真 保育の過程、幼児の教育 67巻5, 6, 7, 10号 昭和43年

津守 真 保育における生命過程と精神 日本保育学会、第27回総会抄録

津守 真 保育研究転回の過程（津守・本田・松井人間現象としての保育研究1の中）、光生館、昭和49年

津守 真 精神薄弱幼児の指導 教育と医学、21巻12号 昭和48年

注2 ここにいう「感じる」とは、人がいろいろの感覚器官によって外界の物を知覚したとき、知覚に伴って生ずる内的な感覚のことである。それは、しばしば、概念の枠を最小にする努力をしたときに体験される。以下この報告で、「感じる」とか、「感覚」というときにはこのような内的な体験をさす。私は、これをイメージといってもよいと思っている。

## 2. 自然にふれる 感覚を十分にたのしむこと、 また、その傍にあること。

<1月13日：室内でしばらく過したが、気げんがよくないので、Sを抱き、庭に通ずる出入口に立つと、冷い風が吹いてきた。とたんに、Sは気持よさそうな表情になり、風に対して顔をむける。身体の動きも静まって、身体全体の表情が変化するのが、抱いていてわかる。私も、冷い風にあたり、気持よい。顔のわき、耳のわきを風が通りぬけてゆくを感じながら、Sを抱いていた。

室内で、他の子どもが泣きわめいた。そのときに、Sも急に泣きわめき、そっくりかえり、自分の頭を右手でたいた。その子が庭に出ていったら、Sも泣きやんだ。

Sは音楽を好む。音楽も泣き声も空気の動きである。中でも最も自然な動きである風に、Sは心地よさを示し、自分の動きを静めて、その風の感覚に身を委ねている。家でも風を好み、カゼというとのことである。Sのごくわずかの語彙のひとつである。>

<2月3日：Sを抱いて庭に出る。寒いけれども、風に吹かれて、表情が静かになり、風をたのしんでいるようである。Sを地面におろすと、歩いてゆき、砂を手でさわし、その手を口にもってゆく。口の中で砂をかむ。数度したが、それきりでやらない。(前2回ほど、砂を口の中に入れることが多く、手ぬぐいを離せなかった)私は、一しよに砂をいじりながら、風に吹かれている。しばらくそうしていたが、寒いので、私は立ち上り、Sの手をつないで早足で歩く。Sも早足で歩く。30メートルほどの庭を、はしまでいった。私は、さざんかの木にSの手をふれさせ、花を一輪とって手にもたせた。Sはすぐ口にもってゆき、花びらが一片口に残る。あとは散って地面に落ちてしまった。数回、庭を往復するが、Sはすぐについて走る。心地よさそうな表情である。走る動きには、耳のわき、体のわきを通りぬける風の感じがある>

風や砂のような自然物の感覚は、刻々と変化しながらつづいてゆく。あるときは強く、あるときは弱く、あるときは散り、あるときは触覚の上を動く。それは、風に吹かれる、砂をいじるといような数語のことばでいうけれども、その内容は多様であり、その変化をひとつひとつ示す語彙をもたない。一言に収めて理解したように思うおとなと異って、言語をもたない子どもにとって、その自然物にふれる感覚は、一層大きな力をもって子どもに迫ってくるであろう。その感覚が、ひとつひとつ、子どもにとってどのような内容となってあらわれている

のか、身を接して近くにいるおとなにもわからない部分が多い。ただ明瞭なことは、子どもがそれを快く感じ、それが普通におとなが思うよりも、もっと長くつづいてよいと感じ、その中に身を委ねていることである。またおとなも、子どもと同じように、そこに腰をすえて、自然物にふれる感覚に身を委ねると、外から見ていた時よりも、ずっと多様な感覚がそこに動いていることを見出す。

<3月15日：庭に出ると、すぐにひとりで歩きはじめ。天気がよく、風が強い。暖い。風に吹かれて歩くのが気持がよいみたいである。はしまでゆくと、地面が少し低くなっており、しりもちをつく。そうすると、あたりの草をいじる。何回か同じようなことをくりかえす。そのうちに立ち上って歩きだす。歩いているうちにブランコにぶつかる。私と向い合わせにのせると、腰かけの上立ち、とんとんとびはねる。背側の金具の上に乗ってしまう。何回もとびはねて後、私につかまって下におりる。他の子どもが傍によってきたので、私は、その子の手と、Sと、私の手とを重ねると、一瞬しずかになる>

風に吹かれ、坐って草をいじる時間を過ぎて後、Sは自分から立上って、歩きだした。これは、Sの側の意志の出現とみてよいと思う(記録の中で、傍点の部分)。歩くという行動だけではなくて、外の世界に立ち向ってゆく精神の動きがある。だから、歩いているうちにブランコにぶつかると、腰かけの上立ったり、さらに上の方まで乗ったり、積極的に新しい世界に向ってゆく。

<べんとうを食べるとき、たべやすいように、一寸手をそえると、手づかみでたべる。たべやすいように、小さくにぎったり切ったりしてあるので、ときたま、手を食物に近よせてやると、たべて、10分くらいで全部たべてしまう。(家では、ひとりで食べないとのことであった。きいてみると、かならず匙を使うようにするが、結局は、母親が全部たべさせることになるとのことであった。小さい子どもは、手で食物をにぎったり、つまんだりして触覚によって食物をたのしみ、そして食物を食べるのであるから、前回より、べんとうを手でたべるようにした。そうすると、最初から、自分の手で全部食べ、たのしそうである。目の見えないSにとって、食べることは、特別のたのしきがあるように思われた。)

食べたあと、からになったべんとう箱の中に手をいれひっくりかえし、歯でしごく。10分位、そうやって、べんとう箱であそぶ。べんとう箱をもったまま、部屋の中を歩きまわる。足につまづいた籠に腰かけ、つまきを手でふれるようにしてやると、つまきを口にくわえ、手に

もったつきで叩く。そのうちに、Sは自分で立上り、歩いてゆき、水道の流しにぶつかると、少し水にぬれている洗面器を顔の前にかかえてもってきて、なめたり、歯でしごく。また、手に持ったつきで洗面器を叩く>

こうして、Sは、徐々に、自分で積極的に動き、ゆきあつたものを、口で感覚や触覚でためしている。こういうように、自分で動いて活動を展開させてゆくのは、ゆっくりと食事をたのしんだあとなのである。このことはこの日にかぎらない。ほとんど毎回のよう、ゆっくりと食事をすると、そのあと、午後は、ほとんどおとなの手を要せず、自分で徐々に動きを展開させてゆくことが多い。

<4月22日：くるとすぐに、Sの手をひいて庭に出る陽があたっていて、私もよい気持であり、だれもがよい気持と感じるような天候である。Sも陽にあたりながらびよんびよん、土の上ではねる。とびはねることは、気持のよいことをあらわすものとみる。ときどき、腹ばいになり、砂をなめる。私は、そのSと一しょにいて、とびはねるときに手を支えたり一しょに隣に坐っている。そのうちに、Sは自分から起き上り、歩きます。歩いていっているうちに鉄棒にぶつかると、鉄棒をにぎり、平行棒にぶつかると、平行棒をにぎる。

Sは、自分であちこちにゆき、私は、ときどき、声をかけて私がそばにいることを知らせたり、何かにぶつかりそうになると声をかけたりする程度にふれていた。こうして、Sは30分以上も、自分のペースで動いていた>

ここでもSは、最初、太陽のあたたかさや土の感触に十分にふれ、そこでおとなと共に相当の時間を過すうちに、自分で動きはじめ、30分以上も自分の動きをしている。その内容は、ほとんど記録するのもむづかしいほど単純なことであるが、それがSの遊びである。

<30分以上もそのような時間がつづいた後、Sは私の首につかまり、ひざにのり、頭の毛をひっぱり、はげしく近寄ってきた。数回、同様のことがあった。

食事のとき、食べながら、私の方を向くので、前を向かせてやる。数回、そのようなことがあって後、私のひざにのり、私にしがみつく。また、私のひざに後向きに坐り、顔を寄せてくる。きげんがわるいのではなく、おなかもいっぱいになって、よいきげんである。私は、Sが迫ってくるはげしさを感じる>

これは、この頃からはじまったSが人にふれるひとつの様式である。何かを欲するので人に求めるのではなく、人にしてほしいのではなく、人そのものに、はげしくふれようとする。そのはげしさに応じるのに、はげしさでこたえることが必要である場合もあり、また、その逆に

静かさをもってこたえるのがよい場合もある。しかし、少くとも、はげしさをもってこたえるときがなければならぬと思う。子どもは、ぶつかり、よじのぼり、ひっぱり、息も荒くなる。火にこたえるのに、四角い金属で密閉した空間にそれをとじこめたら、火はもえさしそのまま消えてしまう。それは、他人との分離となるであろう。

これまでのSの保育は、Sのペースで流れ動いてゆくものに、おとながついてゆく性質のものであった。この日の保育には、人との積極的なかわりがあった。それは、Sの方からぶつかってくる火の玉であった。これはまもなく、おとなに抱いてもらいたがる傾向の初期のあらわれとみるができると思う。

<5月6日：庭にゆくと、気持よさそうにしているが地面にうつぶせになる。手で土をいじる。少し暑いので砂場の日かげになったところにつれてゆき、腹ばいにした。地面より、もっと砂を深くいじる。足も動かすので靴とくつ下をぬがせた。

とたんに、足を活発に動かす。自分から立ち上り、びよんびよんはねる。砂場の端の水たまりで、他の子どもたちが、水の中に入ってじゃぶじゃぶと遊んでいる。次第に、自分の方からそちらに近づく。水たまりまでゆき水の中に腰をおろす。そして、手で水をいじり、立ったり坐ったりして、足でじゃぶじゃぶやる。

しばらく水の中に腰をおろして遊んでいたのも、手をひいて、日なたにくると温い。風が吹いてくる。そこに立って、気持よさそうな表情である。

やがて、自分から歩きはじめる。低鉄棒にゆき当って頭をぶつける。私はさらにぶつからないように、手をあてる。鉄棒の下にしばらく坐りこんでいたので、私は手をひいて、立ちのりブランコの前に立たせ、なわに手をふれさせた。するとすぐに後向きになり、ブランコに坐り、自分で土をけてこぐ。こうして、ブランコにいろいろの坐り方を試みる。私が坐って、Sをひざにのせてこぐと、うれしそうに口をあげて笑う。こんな笑いはずらしい>

ここに掲げたいいくつかの記録にみられるように、戸外におけるSの動きを考えると、まず、Sは、自然の風、太陽のあたたかさ、土や砂の感触、水の感触をたのしんでいる。Sにとって、それらがどのように感じとられているかは正確にはわからないが、その表情からみて、それをたのしんでいることは明かである。私も傍にいて、風が通りすぎる快さ、ぼかぼかと暖かい日ざし、土にふれ、水に手足をいれる感覚をたのしむことができる。このように、自然を感じている時間経過においては、子ど

もは、その自然の動きに身をゆだねている。その間に、風は吹いて来ては去り、陽がさしてはかげり、土や水は刻々に感触をかえる。それは、子どもの意志とは別個の過程である。子どもの側からいうならば、それは生きて動く生命の過程ともいえる。その過程があるところまで進行するところに、精神のひらめきがあらわれる。自分で立ち上って歩いてゆく、ブランコにひとりでのってこぐ（能力面からいうならば、こぐことができるようになる）自分でさぐってブランコなどにゆく（物の位置がわかるようになる）うれしそうに笑い、表情でうれしさを示す、おとなに自分から体をよせてもたれかかり、愛情を示すなどの行動は、いずれも、生命過程の中にあらわれた精神の芽生えとして認識されるとき、子どもの生活の中に位置づけをもった行為となる。

### 3. 人に抱かれたがること。また、抱いて過すこと。

<5月20日：朝、来たときから、泣いている。昨夜はおそくにねて、ね不足だと母親が話す。このごろは、夜10時ころにねて、朝9時ころ目をさまし、10時ころまでふとんの中にいるとのことである。私はSを抱く。

約30分抱いている。Sは私にぴったりくっついて、目をつぶっている。私は床に坐って抱く。

そのうちに、Sはひとりで私のひざから離れて歩きまわる。私はSの手をひいて、すべり台を数回すべる。

元気になって歩きはじめたころ靴と靴下をぬがせる。Sはうつぶせに横になり、足を動かすので、バケツを足の下においてやると、足でバケツをひっくりかえし、中に足をいれ、両足ではさみ、いろいろにいじる。そのバケツを体によせて、ひき上げ、手にとり、手でいじり、バケツを頭にかぶる。そのようなことを何回もくりかえす。バケツの次に、手さげ、ボール、タンバリンなど、いろいろのもので同様にしてあそぶ。30分くらいつづく>

こうして、朝来たときから抱いて、かなり長時間、抱かれて過してから、自分の遊びをはじめるということがこれからしばらくつづく。抱いている時間は、ときには10分くらいのときもあるが、多くは、30分か1時間もつづき、また、ほとんど昼食まで抱いていることもある。そして、多くの場合、十分に抱かれると、Sは、きっぱりとふり切ったように、立上って、歩きはじめる。それから後は、何かにゆきあたって、あそびはじめる。ほとんど毎回、このようなことの連続であった。

4月22日の記録に見たように、抱かれたがるということは、人とふれる感覚を求め、それをたのしんでいるこ

ととえられる。前には自然物をたのしんで過したが、この時期には、人とふれることが、Sの世界の中で重要なこととなってきたのであろう。

<6月3日：朝来て、すぐに抱かれて、30分くらい静かにしていた。そのあと、庭に出て、土の上に乗って、土いじりはじめた。靴と靴下をぬがせると、足の運動が活発になり、立上って、ピョンピョンとぶ。

ひとりで歩いて、すべり台の後までゆき、三輪車にぶつかったので、三輪車を庭の中央に出してきて、のせてやると、足をペダルの上で少し動かす。

ちょうど、そのとき、他の子どもたちは、公園にゆくことになった。私はぎりぎりまで、Sを三輪車に乗せていたが、みんなに間に合うように、三輪車からおろして手をひいて、公園の方につれてゆく。Sは、もっと三輪車に乗せてやりたい感が残った。

途中、石のごろごろした道なので、Sは、自分で歩きつづける様子だったが、抱き上げて、公園の入口までいった。そこでSをおろすと、Sは歩きはじめる。

公園の入口の近くでSは坐りこみ、土をいじりはじめた。そこはあまりに入口の近くだったので、少し先で小さい子をつれた母親が鳩に餌をやっていたので、そこまで抱いてゆき、坐らせた。そこは砂利道で、Sは砂利をいじり口にいはじめた。それで、じきにまた手をひいて歩き、水の流れの方にまで下りていった。

水の流れの中に立たせてやると、一瞬はずまって立っているが、やがて水の中にお尻をつけて、手も水にいれ手足を動かす。水は冷たいので、石の上に腰かけさせるが、じきに水の中に坐ってしまう。気持ちよさそうにしていたが、冷えすぎないかと心配になり、10分ほどで帰路についた。全部抱いて帰った。

部屋にもどり、すぐに着かえさせたが、そのとき、泣きわめいた。食事を終えると、いつものようにすべり台の下にゆきあそび始めたが、また、じきに泣きわめく。それで、相手をしてピアノをひいたりしていた。まもなくピアノのいすから自分でおりて、歩きはじめ、あちらこちら歩きまわる>

この日は、私には何か散漫な感じが残った。いつものような充実感が感じられない。それはどうしてかと考えようとした。そして思い当たったことは、Sに進行中の自然の動きを、何回も中断したということであった。他の日には見られないほど、決定的な中断の場面をいくつか数えあげることができる。

・Sは三輪車ももっとやりたかったのに、中断して、手をひいて別の方向につれていったこと。

・途中、自分で歩きつづけようとしていたのに、石が

ごろごろした道だったので、歩行を中断して、抱いていたこと。

・公園の中で坐りこんで、土をいじりたいのに、私の方の考えで、それを中断して、先の方につれていったこと。

・水で遊んでいたのに、冷えるのが心配で、それを中断して、つれ去り、早目に帰路についたこと。

・帰り路も、Sは自分で歩くことができたのに、抱いて帰ったことなど。

これらは、いずれも、Sの中に自然に動いて次につながってゆく過程の中断である。

この場合の自分自身を考えてみると、Sにふれてとらえた現象とは関連のないところから発想している。(公園にゆくこと、先にすすむことなど)たとえ、それが子どもにとってよいことであり、よろこぶだろうということから考えたとしても、その発想は、Sの現象をとらえたところから出発したものではない。Sの行動をみていて、Sの中に動いているものにつなげてゆこうとしたならば、このように中断をしなかったであろう。この場合についていうならば、Sを公園につれてゆかなくてもよかったかもしれない。たとえつれていったとしても、公園の入口の近くで坐りこんでも構わなかったのである。他の子どもたちに追いつこうとしたり、公園の中の方にまでゆくことを心にきめる必要はなかった。子どもにふれながらも、子どもの行動を、子どもの中に動いている子ども自身の内的世界の表現として見ることでできると、おとなの行為は違ったものとなる。

<6月24日：この日は、電車の中でもずっと眠っていたとのことであり、きたときから泣いている。私はSを抱きとるが、泣いてそっくりかえったり、頭を私に打ちつけたりする。こんなに泣くこともめずらしい。私は、ずっと抱いたり、おぶったりしている。

1時間くらいたったころ、ピアノに合わせて歌を歌うと、しばらくして、私のひざからおりて、歩きはじめ、あそびはじめるようすだった。それで、私は、遊びはじめる前に、おしっこにつれていっておこうという気を起した。そうすると、便所でそっくりかえって、おしっこもしない。そのときからまたむずかり、もはや、もとにもどらない。抱いて庭に出るが、庭でもむずかる。30分くらい抱いて後、昼食にする。たべ始めるとよくたべる。

食べ終ると、Sは自分で立上り、歩いて中二階の階段を自分で上り、しいてあったマットにねそべったり、階段をおりたり上ったりして、ひとりできげんよくあそぶ。>

この日は、Sの気がすむまで抱いていた。途中で、おしっこにつれてゆこうという気を起したのは必要のないことであったが、その後はまたずっと抱いていて、おろそうとはしなかった。Sの世界の中で、自然に何かが推移して極点にまで達すれば、次の局面が開かれる過程をとることを承知し、抱いているのは、その過程のひとつまでであるとの認識もそこにあった。ひきつづいて食事に入り、ゆっくりと食事した後は、自分から立上って、あそびはじめた。あそびはじめるまでの過程を示す、ひとつの典型であると思う。こういう日は、抱いている時間が長くとも、子どもの傍にいて、充実感がある。

#### 4. 過程としての時間

ここに、知恵おくれの盲幼児Sの、約半年間の保育の中から、自分から遊びはじめるまでの過程を示す、比較的典型的な事例をいくつかとり出した。

ここに見たように、子どもが自然物にふれて感じている感覚は、多様な内容をもった動きである。それは風や太陽、土や水の自然界の物質の動きにふれて、子どもが感じ、受けとって、自分の中につくられてゆく動きの過程であって、子どもにとっては、自分がこうしようと思って作ってゆくものではない。その過程が、あるところまで進行しなければ、子どもの積極的な意志は出現しない。保育者は、その傍にあって、その過程に、あるときはともに身を委ね、あるときはそれを見守って、子どもがその過程を全うすることができるようにするのである。

すなわち、前者においては、保育者は子どもと近いところであって、自らの感覚をもとうとする構えである。そこに生ずる感覚は、子どもの感じているものと同じであるということとはできないが、それと同型のものに近づき得るものということができる。その場合には、保育者自身も、子どもと共に過す時間をたのしむことができる。後者においては、過程の認識に立って、それを見守るという技法をもって臨む構えともいえよう。その認識が子どもの行動を、過程として現象的に見ることでできる認識となるとき、技法を無制約に適用するあやまちから逃れることができよう。

このような過程の中に、子どもの意志が出現する「時」がある。過程は連続的であり、意志の出現は、非連続な、飛躍する時である。この時間は、内的な時間であって、等質に分割される直線的な時間ではない。子どもの内的な時間にかかわるおとなの時間も、また、過程としての内的な時間である。それらは相互に違った経過をもって流れる時間であるけれども、一方が、他方から切り

離されて孤立した時間としてあるのではない。そうなったときに、生きた人間としてのふれ合いを失うことになるのではないだろうか。

子どもは、それぞれの過程のいろいろの時点にあるのであって、保育者は、それぞれの時点にある子どもと生活を共にする。それぞれの時は、保育者にとっても、さまざまな感覚の寄せてくる時間であり、また、未知な未来のかくされている時間である。そこには、いつか、意

志が出現することが予受（アンティシペート）されている。しかし、そこでは、意志の出現のみが目的とされているのではない。現在は、変化の一相であり、そこで何か感じるものがなければ、自ら意志をもって行為することもないであろう。

知恵おくれの盲児、Sの事例は、過程としての時間を最も原初的な形態において、示してくれた例であると思う。